

東日本大震災の個人的自戒反省文

長岡技術科学大学

福本 一朗

中越大震災（2005）で大きな被害を受けた長岡技科大では、以来自然災害時に人命を技術の開発を目指した「災害ME研究会（Society of Medical Engineering for Disasters）」を立ち上げ、大学人・企業家・医療関係者・行政官の間の情報交換と技術開発研究を行ってきた。創立当初からの会員である筆者も工学者としてまた一人の臨床医として、不可避的に襲ってくる大災害に対する備えをしてきたつもりであったが、2011年3月11日に発災した東日本大震災・大津波はその規模と被害者数においてまさに常人の想像を大きく上回るものであり、結果として個人的な震災対応と救援活動において反省すべき点が多々見出された。

将来80%以上の確率で必ず襲ってくる東海/東南海/首都直下型大地震に対する防備を備える必要がある事は万人が痛感しているところである。この機会に想定外"と自らの責任を免れようとする情けないエンジニアとならない事を決意して、震災後半年を経た今自ら顧みて自戒の反省文を記す次第である。

（1）被災地医療支援者として

日本プライマリ・ケア連合学会の東日本大震災救援プロジェクトPCATに登録して、2011.4.6～4.8の間被災地の福島県中通りに赴いて医療援助を行った。避難者の疾患は、不眠・便秘・高血圧・上気道感染症であったが、これは中越・中越沖地震の避難所診療の時と同じであったので、持参薬で治療を開始するとともに、近隣医療機関に迅速な患者医療情報の提供を行った。ただ大組織である学会からの派遣指示を待っていたため、実際に被災地派遣命令が発令されたのが発災3週間後と遅く、最も緊急医療が必要とされる被災1週間以内に赴く事ができなかった。今後は個人も学会も発災後直ちに各自現地に出発するべく「常在戦場」の心構えと避難所情報報知システムが必

要と思われた。

また派遣期間中、サーベイメータを持参して援助地の湯本温泉診療所駐車場で大気放射能定点観測を実施した結果、福島原発方向からの海風の強弱に応じて空間線量率は変動するものの、徐々に放射能値が上昇して行くことを発見した。それはその時点で原子炉メルトダウンを疑わねばならない事を示唆していたので、大規模且つ継続的なモニタリングが必要と思われたが、そのデータを被災地自治体に伝える手段もなく、放射線防護に役立てる事ができなかった。このような活動には個人では限界があるため、被災地自治体は各個人からの様々な情報を常時聴取するべく、ホームページアドレスや緊急電話番号等を普段から開示しておくべきであり、救援者は各自可能な限り自治体と連絡を取りながら支援すべきだと反省した事であった。

（2）近隣県避難所巡回診療医として

福島県被災者の長岡市内避難所10か所の内、3か所の大きな避難所では保健師が常駐し、医師の定期巡回がなされていたが、残りは医療関係者の定期巡回もなかった。そのため長岡市から避難所の住所情報をいただき、長岡市医師会から配布されていた赤十字腕章をつけて「一人巡回勝手連」と称して自分一人で巡回診療を行った。しかし最初は行政との連絡が密でなかったため、慢性疾患を有する避難者の薬やお襦袢それに生理用品は不足していたし、海岸の寺泊地区や山間部の栃尾地区などの過疎地に設置された避難所では医療機関を受診するにも交通手段がなかったことを発見しても、それらの対応をすることができなかった。今後はたとえ自分で勝手に巡回する場合でも、行政と市医師会には訪問予定を通知し、市側の担当者とその緊急連絡先を知ると共に、できれば報告会を定期的に行っておくべきだったと反省した。

(3) 工学者の末席を汚すものとして

本来災害ME研究会は、大災害時の救助活動支援機器・救命医療／避難所巡回診療支援システムの研究を目的に創立された。これまで瓦礫に埋まった被災者を発見し救う救命ロボットシステム・避難所診療支援電子カルテ・風力太陽電池を組み合わせた可搬型緊急電源装置等を提案しており、それらは大災害時の救命救急に貢献するものと信じる。しかし東日本大震災では津波で2万人を超える死者・行方不明者と、延べ44万人の避難民を生み出した原発事故という未曾有の大災害であった。それにも関わらず津波や原発の“専門家”は“想定外”として自らの事故回避責任を認めようとしなかった。これは「餅は餅屋」として防災研究を“専門家”だけに任せて、自分は専門である医用生体工学関連の防災システムの研究だけに没頭していれば良いという無責任な態度が、その遠因となったと後悔した。安全安心社会は他人任せでは成立しない、自らが被災者と今後はエンジニアリング・マインドを有する工学者の一人として、例え「素人が何を言うか!」と叱られようと臆せず、「岡目八目」ということもあるので、自らが必要だと考える研究はなんでもやってみようと決意した。

(4) 日本国民同朋として

被災地外の人々には「自分は被災しなかった」という「負い目」があり、義援金寄付はその罪悪感を解消する最もお手軽な方法である。筆者もいままでの災害時と同様今回も、中央募金会と日本赤十字に僅かばかりの義援金寄付を行った。しかし被災地に一番支援が必要な発災後1か月以内にはどちらの組織からも全く義援金支出がなされなかったと聞いた。そのため仕事も住居も失った避難民の方々の中には、行政が対応するまで必要な医療費を支払えない人が続出していた。今後は大きな組織にお任せで頼らず、支出目的をはっきりさせたNPO法人に対してきめ細かな寄付を行うべきだと反省した。また寄付する事で「免罪符」を得たと自分を納得させず、全ての被災者が平穏な生活を取り戻すまで、自分のできる事を少しずつでも継続して行く事が重要と感じた。

(5) 市民の一人として

筆者は電気工学科を卒業した者として、原子力発電に対しその合理性・経済性・安全性を一応は信頼していた。しかし今回の福島第一原電メルトダウンとそれに引続く放射能汚染を見聞きし、原発は安全でもクリーンでも経済的でもないことを痛感させられた。目に見えず感じる事もできない放射能汚染は、心無い人々による風評被害によって被災者をさらに傷つけ苦しめ、巡回診療でお目にかかった原発避難者のほとんどは「もう原発はいらない!」と口々におっしゃっておられた。長岡技科大では2012年度から「原子力安全工学専攻」が発足するが、その設立に筆者は何ら貢献していない。安全工学では「100%安全という事は絶対にはない」とよくいわれるが、こと原発に関する限り「完全廃炉」は将来の原発事故発生確率をゼロにする事ができる。経済損失25兆円という亡国の危機に際して、今後は一市民として政府の原子力政策を常時監視し、頭から「原発ありき」ではなく廃炉も含めて科学的に安全性を検討し、子孫に安全で美しい環境を残す「反原発運動」に積極的に参加すべきだと決意した。

(6) 人間として

大災害は多くの人々の命を奪うとともに、生き残った者に人生を考え直す機会を与える。筆者も中越大震災の被災者となった時、安心できる住まい・温かな食べ物・衛生的な洗面入浴排泄そして勉強と仕事に専念できる平穏な生活が、人間にとって如何に大事なものであるかと痛感させられた。そして今まで“有って当たり前”と思っていた社会生活が、どんなに数多く人々のお蔭で維持されてきたか、どんなに自分が一人では社会生活が営めない無力な存在であるかを思い知らされたが、今回の大震災と原発事故でお会いした被災者の方々とお話しさせていただいて、その思いはさらに強まった。

それはまさに前近代の賢者達が既に思い至っていたことであった。いわく「義人はいない、一人もいない(ローマ人への手紙)」「人は自分の髪の毛一本白くも黒くもできない無力な存在(マタイによる福音書)」、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽(涅槃教)」「色即是空、空即是空(般若

心経)」。これらの箴言は、世界は強大な力で移ろい行くものであり、その中で生きる人間は儂く弱い存在である事を自覚し、それ故にこそ生きている現在を悔いなく生きる事を教え諭している。

しかし凡愚愚昧の徒である筆者は「のど元過ぎれば」で、中越大震災で身につけたと思い込んだ「断捨離」の生活を忘れ、平々凡々たる日常生活に埋没していた。生まれ育ち慣れ親しんだ故郷を

何十年も離れる事を余儀なくされた原発避難者の方々とお会いして、「人々への感謝」と「生きる意味の追求」の重要性を再認識させられた。これからは「人生において一番大事なものは何か?」「今何をなすべきか?」と常に己に問いつつ、毎日毎日を大切に生きて行こうと決意せねばならないと反省させられた。それが東日本大震災から得た自分の最大の教訓・反省であったように思われる。